

愛と清貧の教皇フランシスコ

松浦 俊博

四月二十一日の夕方、ニュースを見ていた妻が「教皇が亡くなった」と言った。最近、彼の衰弱が進み、今年になってから入院したことも知っていたので、「その時が来たな」と思い寂しさに包まれた。それから二十六日の埋葬まではバチカンニュースを見続けた。

二〇一三年、教皇ベネディクト16世の退位により教皇フランシスコが誕生した。その数年前から、年末年始の旅行のついでにバチカンで行われるお告げの祈りを聞きに行っていたが、フランシスコの祈りに集まる人は本当に多く、出身国の偏りがなく、皆の期待の高さが伝わってきた。

フランシスコはイタリア人の両親を持ち、アルゼンチン生まれだ。政情不安の国で貧しい人たちと暮らしてきたので、恵まれない人々に自然に手を差し伸べ、自身も清貧な生活を送ることにこだわってきた。カトリック教会は階層組織で高位の聖職者は権力を持つが、彼はそのようなものを振りかざしたことは全く無いと思う。

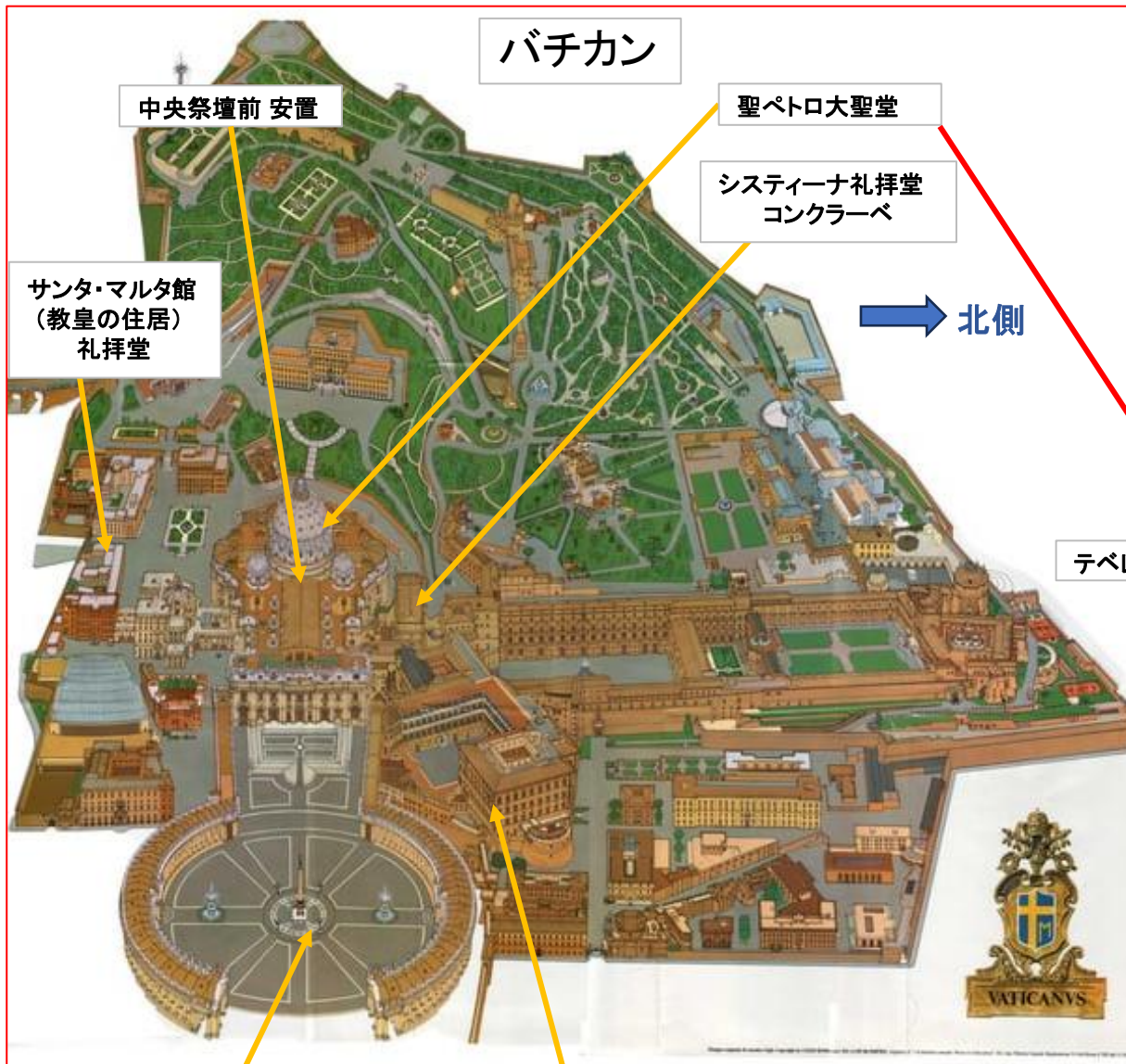
彼が貫いたのは、人々への愛と清貧だと思える。

愛については、キリスト教の他の宗派やイスラム教との交流に力を注ぎ、諸国で平和を説くことに全力を尽くした。「お告げの祈り」ではいつも暖かい励ましの言葉を皆に送っていた。Cari Fratelli e sorelle, buona Pasqua「親愛なる兄弟姉妹、復活祭おめでとう」。彼が死の前日に広場に集まった人たちに送った祝福の言葉の始まりである。皆、彼の弱々しいが最後の力をふり絞った声に聞き入った。

清貧について思い出すのは、まず、清貧の修道僧アッシジのフランシスコの名前を名乗ったことだ。教皇は赤い靴を履く習慣だったのを「普通の黒い靴を履く」と決めたり、教会の儀式の簡略化を進めた。今回の葬儀でも棺も装飾なし、墓もFranciscusとだけ書かれた簡素な墓を聖マリア大聖堂に置く遺言を残した。

彼はいわゆる改革派と呼ばれた教皇である。前教皇のベネディクトは保守派で社会変化に適合できなかった。次の教皇は社会変化に適合でき、世界平和に貢献してくれることを期待している。

フランシスコ教皇の棺の移送025年4月21日～4月26日



棺の移送 : サンタ・マルタ館⇒聖ペトロ大聖堂⇒聖ペトロ広場⇒聖マリア大聖堂
(教皇の住居) 祈り、一般参列 葬儀 埋葬